

巻頭言

農村はいま —労働と 銀行口座

石見 尚

(日本ルネッサンス研究所)

北上山地を雪が薄く覆っている。吹雪が舞う。なぜか過疎の村ほど自然が美しい。とうとうまた来てしまった。

今日のアグリフォーラムの題は「農業の新しい担い手とは」である。あとのイベントが「ふるさと特産コンクール」、「環境美化コンクール」・「農村活動」の表彰とあって、150人ほどの参集者の4分の3は農家の主婦である。

テーマが理念的、抽象的なだけに、果たしてどのような結論になるか、司会を引き受けた私にも皆目見当がつかない。「もの言はぬ農民」という言葉が岩波新書本の書名になったこともある地域であるから、参加者が活発に発言してくれるかどうか心配がさきに立つ。東北農民は重厚なのだ、そしてそれが魅力的なだとみずからに言い聞かせる。昨年「21世紀の協同へ 東北からの発信」の仙台集会で自信をつけているから、今日もなんとかなるさと早速話題の提供にかかる。そのあと討論に移る。

最初の5分は重い空気が会場に流れた。女性がいまでは農業の有力な担い手だという話から、農家の後継者に嫁がくるにはどうするかという話になった。それには嫁にも働きに応じて報酬を払うべきだということになり、我が家ではこうしていると「我が家」の実践話の花が咲きはじめた。

「野菜がこれだけの金額に売れたが、みんなで分けるからお前の分はこれだけだよ」と言って嫁にわたすようにしていると一人がいう。「2千円、3千円の少ない金額でも、うちもそうしている」ともうひとりが応じる。嫁のただ働きほど家族の人間関係を冷たくするものはない。何分、地の言葉でまくし立てるから、嫁にきた昔と今を比較した「うらみつらみ」の微妙な感慨が、よそ者の私にはいまひとつの確にわからない。けれども日本語だから外国語のようなもどかしさはない。

話の弾みついでに、金を渡すには、どうすればよいかの話になった。その場で「ご苦労さん」といって、「現金を渡すのが一番」ということになった。その意味は、司会者流に翻訳すると、自分の労働が認められた、社会のお役に立ったことが身にしみて確認されるということである。また家族のきずな、労働の協同性が暖かく伝わるということである。殊に、じいさん、ばあさんの場合には、労働にたいして現金を渡したときのうれしい顔は、なにものにも替え難いという。高齢者の生き甲斐というものである。

サラリーマンの給与の銀行振り込みのように農協口座への振り込みは、人間労働の心のひだを消し去るといふことらしい。実際、都市サラリーマンの家庭では、口座のある銀行から給料が出ると思っている息子や娘がいるらしい。「おやじ」はやはり給料袋を家族にどんと見せて、妻や息子や娘にご苦労さんと分配し、熱燗一本出てきてこそ、その権威は保たれるのではないか。農業の新しい担い手は、農業・農村の意識に情熱を燃やす個人とともにそれを支える協同労働の組織にあると言わなければならない。人間社会の復権は労働の復権とともに現金（労働の価値表章）の素朴な復権からと思う昨今である。